

地域社会における成人学習者の学習ニーズ

森 越 京 子

目 次

- I. はじめに
- II. 背景
- III. 研究の目的
- IV. 研究の枠組み
- V. 地域の社会人入学に対するニーズ分析：
アンケート調査1の実施
- VI. 在学社会人学生のニーズ調査：アンケート調査2の実施
- VII. まとめ：2つのアンケート調査からの
考察
- VIII. 結語

I. はじめに

大学における生涯学習機会の提供は、ユネスコの高等教育世界宣言や、生涯学習振興法の制定を受け、編入学制度・単位互換制度の導入、複数の大学による連合体(大学コンソーシアム)の創設、科目等履修生制度による学位修得の道が開かれるなど、さまざまな制度改革によって、着実に動き出している(清水, 2001)。

また、IT技術の発展から、インターネット等を利用した遠隔高等教育の可能性は、成人学習者に強い影響を与え、またそれが大学開放を促すと言われている(岩永, 2001 小林, 2003)。岩永(2001)は、アメリカペンシルバニア州立大学の実践例から、近年、成人学生は「アクセスの便」「学習成果の質」「費用」という三つの要因から、ネットワークによるコースの提供を選択するようになってきたと述べている。ITを利用した遠隔教

育の問題点を指摘した上で、従来型の大学教育制度だけでなく、遠隔教育による大学開放の可能性を示唆している。

しかし、これらの制度上の変革やIT技術の進歩にもかかわらず、日本の大学における成人学習は発展段階としてはまだ初期段階にとどまっている状況であると指摘されている(清水, 2001)。また、大学院レベルでは社会人入学者が増加しているが、学部段階への需要は低下傾向に陥っているとされており、出相(2005)は、日本が真の生涯学習社会となるには、社会人入学の拡大が専門職業向けの大学院課程のみならず、学部段階においてもさまざまな入学者を含むものに広がっていくことが望ましいとしている。

社会人はどれくらい高等教育機関での学習に興味を持っているのかという点については、すでにさまざまな意識調査が行われており(稲生, 1994 高尾他, 1994)、これらの調査の結果によれば、一般的に、社会人入学に関心を示すものの、実際に入学を検討するという回答者の割合は低くなっている。「条件を整えば社会人が大学等で学ぶ機会を活用したい」という回答者層の、さまざまな条件に大学側がどれくらい対応できるのが課題である。もちろん、すべて対応できるわけではないが、どのような障害要因があるのか明確にすること、また挙げられた条件に優先順位をつけることが必要である。(稲生, 1994)

出相(2005)は、大学等への入学に対する障害要因について調査を行い、それまでの調査と同じように、第一に費用に関するもの、

次に、時間的な負担感にかかわるものが阻害要因となっていると報告している。さらに、尺度項目の因子分析を行い、「入学に伴う不安因子」「大学教育への非価値因子」「職業関連因子」の三つの因子をあげており、大学で学びたいという潜在的顧客を顕在化するために、大学側も「長期履修制度」の充実や、大学教員が学外で講座を行うことを提案している。それは、大学教育への橋渡しの役割となり、大学教育の価値の認識につながるとしている。また、そのような講座に入試広報や入学相談の機会を設け、入学に伴う不安因子を取り除くことも必要であると述べている。

II. 背 景

北星学園大学・北星学園大学短期大学部では、公開講座の開催や、オープン・ユニバーシティの運営、さらに1983年度より社会人入学制度を導入し、すでにその卒業生はさまざまな分野で活躍をしており、地域社会に対する大学開放の役割の一端を担っている。しかし、大学は、伝統的學生（高等学校卒業後すぐに大学に入学する学生）によってほとんど占められており、社会人学生は少数派であるという事実は免れない。一般的に大学における教育環境は伝統的學生を対象に整えられてきており、非伝統的な學生である社会人学生にとっては、成人学習者の特性を顧慮した上で、非伝統的な学習環境の整備が急務であると指摘されている（小池，2004）。本学短期大学部英文学科では、中期・長期的展望に立った将来構想にむけて、プロジェクトチームで活発な議論が行われている。その中で、地域住民の要望にこたえ「生涯学習」を支える内容をあわせて持つようなコミュニティ・カレッジ型の存在として短大英文学科の可能性について話し合っている。具体的な改革の取組の一つとして、すでに行っている社会人入学制度の需要の拡大について焦点が当てられた。

そこで社会人入学者のニーズを分析し、学びの環境を整備し、「地域に開かれた学びの場」を作ることが課題とされた。今回、すでに本学に在学している社会人学生の学習環境の充実と、将来、社会人学生にとってさらに魅力的な学習環境を提供できるように、本学オープン・ユニバーシティ受講者を対象に「社会人入学制度」についての意識調査を行った。

なお、本研究は、平成17年度現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）「専門職業人となる人材の基盤的英語教育」の分野で採択された「次世代版カリキュラム開発と英語能力取得のための環境作り」の一部であり、北星学園大学短期大学部英文学科の「社会人受入れのための施策作り」の取組である。

III. 研究の目的

本研究の目的は、時代の変化と共に地域社会で必要とされている高等教育機関の役割を探ると共に、本学に在学している社会人学生のニーズを調査し、より良い学習環境を実現することを目指す。また、地域の社会人にとって魅力的な社会人入学制度のあり方を考察する。

IV. 研究の枠組み

1. 地域社会での社会人入学に対するニーズを分析する。
2. すでに在学している社会人入学者のニーズを調査し、具体的な支援について考察する。

上記のテーマのもと、2回のアンケート調査を行った。以下、それぞれの事項についてその調査の結果をまとめる。

V. 地域の社会人入学に対するニーズ分析：アンケート調査1の実施

V-1. アンケート調査の質問項目の選定と調査書作成の手順

本調査では、地域の社会人入学に対するニーズ分析を行うために、本学オープン・ユニバーシティ受講者を対象に、社会人入学制度を利用し正規の学生として学ぶ希望があるのか、また、どのようなプログラムが必要とされているのか、特別なニーズがあるのかという点について質問項目を作成した。さらに、長期履修制度の必要性について、社会人学生向けの海外研修に興味があるかという点についても設問を作成した。その結果、調査内容は下記の6つの領域に渡った。

- ①回答者プロフィールに関する質問
- ②社会人入学に関する質問
- ③長期履修制度の導入について
- ④短大・大学で学びたい内容
- ⑤社会人学生のための海外研修について
- ⑥社会人入学について自由記述のコメント

上記の6つの領域について、合計で15の設問を作成した。回答形式は、「はい」「いいえ」で答えるもの、複数項目から選択するものを中心とし、必要に応じて回答内容の詳細を加えた。さらに、社会人入学制度について広く意見を聞くために、自由記述の質問項目も作成した。アンケート設問用紙、マークカード作成にあたっては、用紙の大きさと枚数に制限があったが、わかりやすい表現で、できるだけ大きな文字で設問を作成し、マークシートも記入しやすいよう大きさを工夫した。

V-2. アンケート調査のサンプリング、実施時期、および回収方法

調査は、本学オープン・ユニバーシティで語学などのプログラムを受講している地域の成人を対象とした。オープン・ユニバーシティは本学在生も参加できるが、在生にはこのアンケートの回答をしないようお願いした。アンケートは2005年度秋から始まる講座の受講者に、第1回目の授業の折、担当者からそれぞれアンケート用紙の配布・説明を行った。その後、アンケート回収箱を大学1階入り口近くに設置し、定期的に回収した。最終的には、10月末までに、312人の回答を得られた。これはオープン・ユニバーシティ受講者全385人の81.0%にあたり、高い回収率となった。

V-3. 調査結果と考察

①回答者プロフィールについて

回答者の多くが女性であるが、幅広い年代層からのからの回答が得られた。各回答者のプロフィールは、表1～3の示す通りである。

表 1

性別	回答数	%
男性	83	26.6%
女性	225	72.1%
回答なし・無効回答	4	1.3%

表 2

年齢	回答数	%
10代	8	2.6%
20代	46	14.7%
30代	55	17.6%
40代	71	22.8%
50代	83	26.6%
60代	40	12.8%
70歳以上	6	1.9%
回答なし・無効回答	3	1.0%

表 3

職 業	回答数	%
自営業主	16	5.1%
勤め(全日)	126	40.4%
勤め(パート・臨時)	61	19.6%
学生	14	4.5%
専業主婦主夫	56	17.9%
無職(退職)	25	8.0%
その他	11	3.5%
回答なし・無効回答	3	1.0%

②社会人入学に関する質問

社会人入学に関する質問は、表4～9が示す通りである。

表 4 あなたは、将来、社会人として短大・大学に入学する希望がありますか。(一つ選んでください。)

項 目	回答数	%
はい	51	16.3%
いいえ	133	42.6%
どちらともいえない	100	32.1%
回答なし・無効回答	28	9.0%

社会人として短大・大学に入学する希望がありますかという問いに、「はい」51名(16.3%)、「いいえ」133名(42.6%)・「どちらともいえない」100名(32.1%)と続いている。「はい」と答えた回答者は16.3%と少ない割合になっているが、実数では51名が短大・大学に入学することに興味を抱いていることになり、この数を無視することはできない。

表 5 「いいえ」又は「どちらともいえない」と答えた方は、あてはまる理由をすべて選んでください。

項 目	回答数	%
時間がない	109	34.9%
授業料が高い	69	22.1%
通学が難しい	28	9.0%
興味、必要が無い	48	15.4%
授業についていけないか心配・卒業できる自信がない	52	16.7%
他の学生とうまくやれるか心配である	9	2.9%
その他	25	8.0%
回答なし・無効回答	1	0.3%

記述 入学試験に受かると思えない(2)
参加したい分野がない(1)
希望する学部があるかどうか(1)
健康に自信がない(1)

社会人として短大・大学に入学する希望がありますかという問いに「いいえ」「どちらともいえない」と回答した理由として、最も多いのは「時間がない」109名(34.9%)であるが、「授業料が高い」69名(22.1%)、「授業についていけないか心配・卒業できる自信がない」52名(16.7%)、「興味・必要がない」48名(15.4%)、「通学が難しい」28名(9.0%)、「他の学生とうまくやれるか心配である」9名(2.9%)と続いております。また、「その他」25名(8.0%)となっており、その記述の部分から、「入学試験に受かると思えない」2名など入学試験に対する不安や、興味のある分野の学習ができない、健康面の不安なども挙げられる。

表6 一般的に、社会人が短大・大学で学ぶ理由は何だと思えますか、あてはまるものすべてを選んでください。

項目	回答数	%
短大・大学の学位取得のため	68	21.8%
一般的な教養を高める	128	41.0%
仕事に必要な知識・スキルを身につけるため	139	44.6%
就職のため	19	6.1%
興味のある分野について学ぶため	202	64.7%
社交の場を求めて	17	5.4%
その他	2	0.6%

短大・大学で学ぶ理由としては、「興味のある分野について学ぶため」202名(64.7%)、「仕事に必要な知識・スキルを身につけるため」139名(44.6%)、「一般的な教養を高める」128名(41.0%)、「短大・大学の学位取得のため」68名(21.8%)と続いているが、「就職のため」19名(6.1%)、「社交の場を求めて」17名(5.4%)については数が少なく、回答者の純粋な学問・知識への興味が短大・大学で学ぶことにつながっていると考えられる。

表7 最も快適な通学日数はどれくらいですか、一つ選んでください。

項目	回答数	%
週に1-2日	207	66.3%
週に3-4日	92	29.5%
週に5日以上	4	1.3%
回答なし・無効回答	9	2.9%

快適な通学日数としては、「週に1-2日」207名(66.3%)となり最も多く、「週に3-4日」92名(29.5%)「週に5日以上」4名(1.3%)が続き、通学日数が少ないことを多くの回答者が希望している。

表8 通学に適している時間帯はいつですか、あてはまるものをすべて選んでください。

項目	回答数	%
平日午前	54	17.3%
平日午後	59	18.9%
平日夜間	190	60.9%
土日午前	72	23.1%
土日午後	78	25.0%
土日夜間	32	10.3%
その他	3	1.0%

記述 都合のつく時間(1)
会社の休日(1)

通学に適している時間帯は「平日の夜間」190名(60.9%)、「土日午後」78名(25.0%)、「土日午前」72名(23.1%)を希望しており、夜間や週末の開講がなければ、通学が難しい状況を示しているように考えられる。「平日の午後」59名(18.9%)、「平日の午前」54名(17.3%)、「土日夜間」32名(10.3%)となっている。

表9 授業料の支払についてどのような制度が必要だと思えますか、あてはまるものをすべて選んでください。

項目	回答数	%
分割支払い	132	42.3%
奨学金制度	72	23.1%
社会人特別補助	220	70.5%
その他	12	3.8%

記述 一括でよい(1)
コンビニでの払い込み(1)

授業料に関しては、「社会人特別補助」220名(70.5%)、「分割支払い」132名(42.3%)、「奨学金制度」72名(23.1%)となっており、その他の記述には、「一括でよい」「コンビニでの払い込み」のように、支払手続きの利便性を望む声も無視できない。

③長期履修制度の導入について

長期履修制度の利用の場合の希望卒業年数については、表10・11の通りである。

表10 短大で長期履修制度が可能な場合、何年で卒業したいですか、一つ選んでください。

項 目	回答数	%
2年	84	26.9%
3年	112	35.9%
4年	83	26.6%
5年	10	3.2%
6年以上	9	2.9%
回答なし・無効回答	14	4.5%

表11 大学で長期履修制度が可能な場合、何年で卒業したいですか、一つ選んでください。

項 目	回答数	%
4年	109	34.9%
5年	63	20.2%
6年	80	25.6%
7年	17	5.4%
8年以上	20	6.4%
回答なし・無効回答	23	7.4%

短大の場合、「3年」で卒業したい112名(35.9%)、「4年」83名(26.6%)と、6割以上の回答が長期履修制度を使って1～2年余裕を持って卒業したいと考えているようだ。通常の修学年数「2年」で卒業は、84名(26.9%)となっている。大学の場合、通常の修学年数「4年」109名(34.9%)を希望している数が最も多いが、「6年」80名(25.6%)、「5年」63名(20.2%)、「8年以上」20名(6.4%)、「7年」17名(5.4%)となっており、長期履修制度利用の希望は過半数を超えておりその必要性も感じられる。

④短大・大学で学びたい内容

表12・13・14が示すように、短大・大学で学びたい内容・参加したい活動について回答

を求めた。

表12 短大・大学でどのようなことを学んでみたいですか、あてはまるものをすべて選んでください。

項 目	回答数	%
語学	201	64.4%
心理学	112	35.9%
社会福祉	66	21.2%
経済学	60	19.2%
社会学	36	11.5%
歴史や文学	104	33.3%
自然科学	45	14.4%

表13 (上記と同じ質問です。)短大・大学でどのようなことを学んでみたいですか、あてはまるものをすべて選んでください。

項 目	回答数	%
コンピュータ	101	32.4%
ビジネススキル	88	28.2%
資格取得	152	48.7%
健康	43	13.8%
ファイナンシャルプランニング	64	20.5%
その他	24	7.7%

記述 キリスト教関係 (1)

短大・大学で学んでみたい内容として、「語学」201名(64.4%)、「資格取得」152名(48.7%)と続いていて、語学・資格への関心の高さを示しているが、回答者が語学や資格取得の講座に参加している人がほとんどであり、もともと興味がある分野なので、この数字を一般化できない。続いて「心理学」「コンピュータ」「歴史や文学」「ビジネススキル」が約3割、「社会福祉」「ファイナンシャルプランニング」「経済学」についてそれぞれ約2割の回答者が興味を示しており、さまざまな分野に幅広く興味関心が広がっているようである。

表14 大学でどのようなことに参加してみたいですか、あてはまるものをすべて選んでください。

項目	回答数	%
国際交流	211	67.6%
音楽・美術などの文化活動	93	29.8%
スポーツ活動	49	15.7%
ボランティア活動	75	24.0%
海外研修	147	47.1%
その他	10	3.2%

記述 専門職の人との交流 (1)

短大・大学で参加してみたい内容については、「国際交流」211名(67.7%)、「海外研修」147名(47.1%)と高く、本学の特色でもある国際交流に大きな期待を寄せている。これは、現在受講している語学のクラスで学んだことを生かすことができる国際交流に関心が集まったのではないかと考えられる。「音楽・美術などの文化活動」93名(29.8%)、「ボランティア活動」75名(24.0%)、「スポーツ活動」49名(15.7%)も比較的関心を集めている。

⑤社会人学生のための海外研修について

海外研修の参加の希望を聞き、自由記述の形でさらに、社会人学生のための海外研修の内容・日程・費用について回答を求めた。

表15 「社会人学生のための海外研修(単位認定)」を企画した場合、あなたは参加を希望しますか。

項目	回答数	%
はい	140	44.9%
いいえ	44	14.1%
どちらともいえない	112	35.9%
回答なし・無効回答	16	5.1%

社会人学生のための海外研修(単位認定)」に参加希望かという問いに「はい」と答えたのは140名(44.9%)、「いいえ」44名(14.1%)、「どちらともいえない」112名(35.9%)

となっており、興味を示す回答者も居るが、「どちらともいえない」という回答に反映されるように多くの場合諸条件が整わないと参加するのは難しいのではないかと予測される。

自由記述の内容

[日程について]

目的によって違うが、「1週間」・「1ヶ月」を希望する回答がそれぞれ多くなっており、「10日前後から2週間」の意見も含めると、比較的短期間の研修を望んでいるようである。1ヶ月を超えるような長期間の希望も中にはあるが少数意見である。具体的な日程の希望だけでなく、「仕事を休みやすい時期の開催」の要望も共通して見られる。また、「自由な日程」、「ゆとりのある日程」のようにスケジュールの柔軟性についての記述もあった。

[内容]

「語学を学ぶ」「ホームステイを経験する」などを語学スキルアップの意見が多いが、さらに「その国を知る」「文化・歴史について学びたい」という意見や、それぞれの「仕事に関連した内容」「専門的な分野・興味のある内容」を海外で学びたいという回答もあった。「個人ではできない経験・内容」のように、プログラムのユニーク性、参加することへの有意義性を重視する回答があった。

[費用]

費用に関する記述では、「なるべく安く」という回答が最も多い。金額的には「20万から30万円」の記述が多い。それ以外の特徴としては、分割払いや補助金制度の希望について意見があった。

[その他]

「家族と共に参加できるもの」「職場での認知度を高めること」など、本人だけでなく周りの諸条件についての記述があった。「仕

事をしながらでは参加は無理」「興味はない」という意見も少数ではあるが無視できない。

⑥社会人入学制度について感じていること (自由記述)

自由記述の形で、社会人入学全般に渡って感じていることについて回答を求めた。ここでは、次の4つのポイントにまとめる。

(1) 社会人入学に対する肯定的・否定的な意見

「(社会人入学制度は) 良い制度である」「大いに企画して欲しい」「もっと受講者が増えるといいと思う」「条件を整えば入学したい」など肯定的な意見も多かった。しかし、「仕事をやめなくてはいけないので踏み切れない」「勉強したいが仕事を休むことができない」など仕事との関連で社会人入学は難しいとする意見も同じくらい寄せられた。「もっと気軽にできたらよいと思う」「希望があるが実現が難しい」などの意見を含めると、条件が合い、環境が整備されれば勉強したいという気持ちがあるようにも読み取れる。

(2) 学費に関すること

「学費が高い」「経済的に無理」など、学費に関するコメントが多かった。それに関連して「入学金免除」「卒業生の割引制度」が必要であるとの意見もあり、「学費が安ければ入学したい」との意見を含め、学費負担軽減のための検討が必要である。すでに大学で行っている「社会人補助制度」の広報や、情報の周知もさらに必要であると感じる。

(3) 通学や入試について

「夜間の授業を希望」という意見が多いことや、「通学・通信の両方で単位を取得できるように」、「1年単位の授業」など、通学に関する点が挙げられる。また、「募集人数の

拡大」「募集時期を遅く」など、学生募集についての意見も寄せられた。

(4) 社会人学生支援に関して

「講義を休んだ時の対応」「入試・パソコンや語学の授業についての不安」「講義を行う場所の検討を希望」などの意見がある。「仕事に直結した制度」「学びたい企業社員のバックアップシステムの整備」など、現在の職場での環境整備、社会人学生に対する社会的な理解が必要であると考えられる。

V-4. アンケート調査1のまとめ

地域の社会人入学に対する意識をアンケートの形で実施し、本学のオープン・ユニバーシティ受講者を対象に調査を行った。学びたいと感じている人はいるが、社会人学生として正規に短大・大学に入学するには諸条件が整わなければならない、また、社会人入学に関するさまざまな不安を抱えている様子が伺えた。特に、時間と費用の面での問題があるようである。さらに長期履修制度については、規定の短大2年、大学4年で卒業したいという層もあるが、1年から2年時間をかけて、または、ゆっくり時間をとって学びたいというニーズも見えてきた。また、学びたい分野や参加したい活動についても幅広い分野にまたがっており、語学・資格取得・心理学・歴史文学の順で多くなっており、それぞれの興味にあわせていろいろな科目を用意することも必要であると感じられた。最後に海外研修に関しては、比較的多くの回答者が興味を示しているが、時間・日程の柔軟性、研修内容の工夫が必要であると感じられる。現在オープン・ユニバーシティに参加している回答者には、「純粋な学びのニーズ」があり、諸条件が整えば、社会人学生として、正規に短大・大学に入学する可能性があるのではないかと

VI. 在学社会人学生のニーズ調査： アンケート調査2の実施

VI-1. アンケート調査の質問項目の選定と 調査作成の手順

本調査では、すでに在籍している社会人学生について、どのような目的で社会人入学したのか、また、社会人学生にとって快適な学習環境が整っているのか、特別なニーズがあるのかという点について質問項目を作成した。さらに、プロジェクトチームの話し合いの中で取り上げられた長期履修制度の必要性について、また、本学科で長年実施してきた海外研修は社会人学生にも魅力的なプログラムであるかどうかという点についても設問を作成した。調査内容は下記の6つの領域に渡った。

- ①回答者プロフィールに関する質問
- ②社会人入学制度に関する質問
- ③社会人の必要としている環境整備について
- ④長期履修制度の導入について
- ⑤社会人学生のための海外研修について
- ⑥社会人入学について自由記述のコメント

上記の6つの領域について、合計で17の設問を作成した。回答形式は、「はい」「いいえ」で答えるもの、複数項目から選択するものを中心とし、必要に応じて回答内容の詳細を加えた。さらに、広く社会人学生の意見を聞くために、自由記述の質問項目も作成した。アンケート設問用紙、マークカード作成にあたっては、用紙の大きさと枚数に制限があったが、わかりやすい表現で、できるだけ大きな文字で設問を作成し、マークシートも記入しやすいよう大きさを工夫した。

VI-2. アンケート調査のサンプリング、実施時期、および回収方法

調査対象は、一般的な大学入学年齢と考えられる18歳前後に入学した学生ではなく、①社会人入学制度を利用して入学した学生、また、②編入学制度を利用して入学した25歳以上の学生、③一般受験で入学した30歳以上の学生32名を対象とした。本学の入試要綱に規定された社会人入学の対象は、

満25歳以上の人で以下1～3のいずれかに該当する者または、満22～24歳の人で以下1～3の条件のいずれかを満たして4年以上経過している者（1. 高等学校を卒業したもの、2. 通常の課程による12年の学校教育を修了した者、3. 学校教育法施行規則第69条の規定により、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められる者）

とされているが、この制度を利用しない場合でも、上記の②～③の条件に該当する学生は、本学以外で何らかの社会経験があると判断した。アンケートは10月中旬に各学生へ郵送し、返信封筒を利用して回収を行った。回答期間約2週間と短い期間に関わらず、16名の回答がよせられ、回収率は50%となった。

VI-3. 調査結果と考察

①回答者プロフィールについて

16名の回答者とサンプル数は少ないが、幅広い年代からの回答が得られた。各学生のプロフィールは、表16～18の示す通りである。

表16

性別	回答数	%
男性	6	37.5%
女性	10	62.5%

表17

年 齢	回答数	%
20代	4	25.0%
30代	3	18.8%
40代	3	18.8%
50代	4	25.0%
60代	2	12.5%
70代以上	0	0.0%

表18

職 業	回答数	%
自営業主	0	0.0%
勤め (全日)	1	6.3%
勤め (パート・臨時)	2	12.5%
学生	8	50.0%
専業主婦主夫	1	6.3%
無職 (退職)	4	25.0%
その他	0	0.0%

②社会人入学制度に関する質問

社会人入学制度に関する質問は、表19・20の二問である。

表19 社会人として短大・大学に入学した目的は何ですか、あてはまるものすべてを選んでください。

項 目	回答数	%
短大・大学の学位取得のため	6	37.5%
一般的な教養を高める	5	31.3%
仕事に必要な知識・スキルを身につけるため	6	37.5%
就職のため	4	25.0%
興味のある分野について学ぶため	11	68.8%
社交の場を求めて	0	0.0%
その他	1	6.3%

社会人として短大・大学に入学した目的として、「興味のある分野について学ぶため」11名 (68.8%)、「短大・大学の学位取得のため」・「仕事に必要な知識・スキルを身につけるため」6名 (37.5%)と続いている。「就職のために」という回答は、予想に反し

て4名 (25.0%)と多くはなかった。

表20 社会人入試の制度について、どのような形が最適だと思いますか。一つ選んでください。

項 目	回答数	%
筆記試験+面接	7	43.8%
筆記試験のみ	2	12.5%
面接のみ	0	0.0%
論文形式	0	0.0%
論文形式+面接	5	31.3%
自己推薦 (自己推薦書提出と面接で自己PRする。)	0	0.0%
その他	1	6.3%
回答なし・無効回答	1	6.3%

「筆記試験+面接」7名 (43.8%)、「論文形式+面接」5名 (31.3%)、「筆記試験のみ」2名 (12.5%)と続いているが、面接と何らかの試験の組み合わせが必要であると考えられ、柔軟性のある、さまざまな形式での入学試験が期待されているようである。

③社会人の必要としている環境整備について

社会人の必要としている環境整備について、表21～24が示すように通学日数・時間・学費の支払い・環境整備の点から回答を求めた。

表21 最も快適な通学日数はどれくらいですか、一つ選んでください。

項 目	回答数	%
週に1-2日	1	6.3%
週に3-4日	13	81.3%
週に5日以上	1	6.3%
回答なし・無効回答	1	6.3%

快適な通学日数としては、「週に3-4日」13名 (81.3%)となり、ほとんどの回答者の意見となっている。「週に1-2日」「週に5日以上」は、各1名 (6.3%)で少数意見である。

表22 通学に適している時間帯はいつですか、あてはまるものをすべて選んでください。

項目	回答数	%
平日午前	11	68.8%
平日午後	13	81.3%
平日夜間	5	31.3%
土日午前	3	18.8%
土日午後	1	6.3%
土日夜間	1	6.3%
その他	0	0.0%

通学に適している時間帯は「平日の午後」13名（81.3%）、「平日の午前」11名（68.3%）、「平日の夜間」5名（31.3%）となっており、ほとんどが平日を希望している。週末に関しては、「土日午前」3名（18.8%）、「土日午後」・「土日夜間」各1名（6.3%）と、通学にはあまり適していないようである。

表23 授業料の支払についてどのような制度が必要だと思いますか、あてはまるものをすべて選んでください。

項目	回答数	%
分割支払い	12	75.0%
奨学金制度	6	37.5%
社会人特別補助	13	81.3%
その他	0	0.0%

授業料に関しては、「社会人特別補助」13名（81.3%）、「分割支払い」12名（75.0%）、「奨学金制度」6名（37.5%）となっており、それぞれ希望が多い。

表24 社会人が短大・大学入学後、充実した学生生活を送るために何が重要だと思いますか、あてはまるものをすべて選んでください。

項目	回答数	%
社会人入学生のためのオリエンテーションの充実	7	43.8%
社会人学生のためのアドバイザー制度の充実	9	56.3%
社会人学生のためのラウンジ	5	31.3%
社会人学生の定期的な集まり	4	25.0%
社会人学生のための掲示板	5	31.3%
学生用ロッカー	8	50.0%
その他	2	12.5%

社会人学生のために必要なものとして「社会人学生のためのアドバイザー制度の充実」9名、「学生用ロッカー」8名、「社会人入学生のためのオリエンテーションの充実」7名とどれも要望が多い。続いて「社会人学生のためのラウンジ」「社会人学生のための掲示板」各5名、「社会人学生の定期的な集まり」4名と社会人に必要な環境がまだまだ整っていないと思われる。

その他の記述内容は、「駐車場」、「社会人学生のラウンジで横になれる場所」、「社会人学生メーリングリスト」「教員の理解・意識」などが挙げられている。

④長期履修制度の導入について

長期履修制度の導入について利用の可能性・希望の卒業年数は、表25～27が示す通りである。

表25 長期履修制度があれば利用したいですか。

項目	回答数	%
はい	9	56.3%
いいえ	5	31.3%
どちらともいえない	2	12.5%

長期履修制度を利用したいという問いに、「はい」と回答したのは9名(56.3%),「いいえ」5名(31.3%),「どちらともいえない」2名(12.5%)となっており、過半数の回答者が制度の利用に興味を持っている。

問26 短大で長期履修制度が可能な場合、何年で卒業したいですか、一つ選んでください。

項 目	回答数	%
2年	5	31.3%
3年	8	50.0%
4年	2	12.5%
5年	0	0.0%
6年以上	0	0.0%
回答なし・無効回答	1	6.3%

問27 大学で長期履修制度が可能な場合、何年で卒業したいですか、一つ選んでください。

項 目	回答数	%
4年	6	37.5%
5年	1	6.3%
6年	6	37.5%
7年	0	0.0%
8年以上	1	6.3%
回答なし・無効回答	2	12.5%

短大の場合、「3年」で卒業したい8名(50%),「4年」2名(12.5%)と、6割以上が長期履修制度を使って1~2年余裕を持って卒業したいと考えているようだ。通常の修学年数「2年」で卒業は、5名(31.3%)となっている。大学の場合、「6年」6名(37.5%),「5年」1名(6.3%)となっており、長期履修制度利用の希望は短大と比較すると低くなっていて、通常の修学年数「4年」は6名(37.5%)となっている。やはり4年という年数は長い間その期間内に終了しようとすることも現実的なのであろう。

⑤社会人学生のための海外研修について

海外研修の参加の希望を聞き、自由記述の形でさらに、その内容・日程・費用について意見を求めた。

問28 「社会人学生のための海外研修(単位認定)」を企画した場合、あなたは参加を希望しますか。

項 目	回答数	%
はい	7	43.8%
いいえ	3	18.8%
どちらともいえない	6	37.5%

社会人学生のための海外研修(単位認定)に参加希望かという問いに「はい」と答えたのは7名、「いいえ」3名、「どちらともいえない」6名となっており、興味を示す回答者も居るが、「どちらともいえない」という回答に反映されるように多くの場合諸条件が整わないと参加するのは難しいのではないかと予測される。

自由記述の内容

[日程について]

目的によって違うが、「1週間」から「2週間」を希望する回答と、「3ヶ月」から「6ヶ月」など長期にわたる回答など、ばらつきが見られた。また、多様な日程の設定を希望している回答も見られる。

[内容]

「語学」を学びたいという語学スキルアップの意見が多いが、さらに「文化・歴史について学びたい」「国際協力」という意見や、「現地の社会人学生の学生生活、勤務姿に触れたい」「自分の専門に関する内容(福祉関係の施設見学など)」を海外で学びたいという回答もあった。

[費用]

費用に関する記述では、「20万円」「30万円」「100万円」など、日程によっても意見が違っ

ているが、できるだけ自己負担を少なく、費用面での補助を希望している意見がある。

[その他]

「年に数回開催する」、「研修説明会に出席できないときに特別な対応を望む」など、社会人学生にはそれぞれ違った要望があり柔軟なプログラムや対応が必要とされているようだ。

⑥社会人入学制度について感じていること
(自由記述)

自由記述の形で、社会人入学全般について感じていることについて回答を求めた。その内容はそれぞれ少数の意見であるが社会人学生のための環境整備にとって、さらにこれから入学する社会人学生のためにも大いに役立つ内容である。ここでは、次の5つの分野にまとめる。

(1) 学ぶ場所としての短大・大学の開放

「学ぶことに充実感を得ている」「学びたい人が学びたい時間に学べる環境を」「社会人枠を増やして欲しい」など、社会人の学びの場が必要とされているコメントがあった。

(2) 情報の提供

「入学前や受験準備のための資料として、授業内容などについて事前に知りたい」「単位認定の範囲を具体的に教えて欲しい」「体育館の使い方とかでも調べないとわからない」など、さまざまな情報が不足しており、どこで誰から情報を得られるかということも重要な問題のようである。

(3) 教員・職員の対応と周囲からの理解

「説明不足」「一方的な姿勢」に不満を感じている回答も見られる。「教務課等にアドバイスしてくれる方が欲しい」「社会人に対

しての学生からの差別めいたことに耐えられない」など、教職員の適切な対応や一般の学生からの理解も必要とされている。

(4) 社会人学生間の交流

「社会人学生で集まりたい」「社会人学生の友人の輪を広げたい」「Web 掲示板などで情報交換をしたい」など社会人学生間の交流を希望する回答があった。また、留学生や色々な人とももっと交流をしたいという意見もある。

(5) 制度・設備などに関して

「ロッカーの設置」「車で通学許可」「夜間講義の開講」を希望している回答がある。また、「体育・語学・情報処理での配慮が必要」など個人的な意見ではあるが、切実な問題でもあるようだ。

VI-4. アンケート調査2のまとめ

調査の結果から、社会人が学ぶ場としての大学開放の有意義性が強く感じられたと同時に、本学に在籍している社会人学生が現在必要としているのは、情報の提供や、周囲の理解、社会人学生に対して説明をしたり、アドバイスをするような窓口、つまり、専門のスタッフなのではないだろうか。それが教員または教務などの事務職員であっても、とにかくどこに行けば問題が解決するのかということが明確でないことが問題のように感じられる。また、物理的な整備として、駐車場やロッカー等の意見もあるが、ほとんどの場合、ソフト面の対応が必要であると感じた。回答の多くが、社会人ならではの心理的な問題を提起しており、社会人の不安を取り除くような、社会人学生同士の交流の場、大学全体で社会人を理解しサポートしていくような体制が必要なのではないか。

Ⅶ. まとめ：2つのアンケート調査からの考察

二つの調査では、共通の設問もあったが、異なった設問もあり、また、本学の正規の社会人学生グループと、オープン・ユニバーシティ受講者グループの意見を単純に比較することはできないが、社会人入学制度を改善する、また、社会人入学を可能にするいくつかの特徴が見られた。

(1) 短大・大学で学ぶ理由は純粋な学びのニーズである

両方のグループで、短大・大学で学ぶ理由として「興味のある分野について学ぶため」が最も多くなり、純粋な学びの欲求を読み取ることができた。「仕事に必要な知識・スキルを身につける」という項目は、比較的高い数値が出ているが、「就職のため」など直接仕事に結びつける理由は予想に反して少なかった。また、オープン・ユニバーシティ受講者の興味のある内容がさまざまな分野にまたがっていることから、提供する学問の内容を充実させ、良質な講義・幅広い選択肢を準備すれば、学びのニーズに対応できるのではないかと考えられる。

(2) さらに多くの成人が社会人入学を可能にするには平日夜間・週末開講クラスの開設である

オープン・ユニバーシティ受講者の快適な通学日数は「週1-2日」207人66.3%で最も高い。これは在学の社会人学生で「週に3-4日」が最も高かった点とは異なる。オープン・ユニバーシティ受講者の希望の通学時間帯は平日の夜間が190人60.9%と最も高く、また週末の希望も続いて多くなっているが、現在の社会人学生の場合、平日の午後や午前の希望が多い。現状では社会人学生になるには「週に3-4日」大学に通う時間があるこ

と、その上、平日の時間を確保できることが必要なのではないか。将来、さらに多くの社会人に対応するには、平日夜間の授業の開講や、週末を利用した授業展開の必要性を感じる。本学には、大学院や一部の科目で夜間に授業を実際に行っているが、全学的に夜間に開講するクラスを増やし、同じ科目のいくつかのユニットを夜間に開講するなど工夫が必要である。

(3) 長期履修制度の活用

長期履修制度で希望の卒業年数に対する回答が示すように、両方のグループで、規定の短大2年、大学4年で卒業したいという回答者も3割ほど居るが、1~2年さらに時間をかけて、もっとゆっくり学びたいという回答の存在も無視できない。社会人学生の選択肢のひとつとして長期履修制度があれば、さらに短大・大学に入学したいと考える人が増えるのではないだろうか。

(4) 海外研修は柔軟性がありユニークな経験を提供できるものを

海外研修については、興味を示している回答がそれぞれ多いが、できるだけ費用を抑えて、開催日程や時期をかなり柔軟なものにし、内容が社会人にとって有益なものが必要とされている。個人での海外旅行が一般的になり、大人のホームステイ・ロングステイというプログラムも商業ベースで盛んになっている今日、短大・大学で行う海外研修の独創性と有益性が求められているのかもしれない。

(5) ハード面の充実だけでなく、不安を取り除くソフト面の充実が重要である

学生生活を充実させるために、「社会人学生のためのアドバイザー制度」「社会人入学のためのオリエンテーション」などを活用して、社会人が必要としている情報を提供する体制、また、いつでも質問に答え、アドバ

イスをするような体制が整うことが必要とされていると感じる。もちろん「駐車場・ロッカーが必要である」など、ハード面の充実も挙げられているが、社会人には特にソフトの面の充実、不安を取り除くサポート体制が必要なのではないかと感じられる。

(6) 社会人のニーズはさまざまである。

社会人学生の感じ方や、学習に対する考え方、学習環境に対するニーズは人によってかなり違いがあり、特別な支援を必要と強く感じる学生もいれば、社会人というカテゴリーで括られ、特別に対応されることを望まない学生もいる。伝統的な学生よりも社会人のニーズは多様であり、大学側の対応も個々の学生に合わせて、柔軟でなければならない。

VIII. 結 語

二つの調査をほぼ同じ時期に実施したが、設問についてすべて統一されていない点、回答者数の大幅な差、調査の実施方法の違いなどいくつか問題点があった。また、今回は、本学のオープン・ユニバーシティ受講者を対象にしたため、その多くが語学に興味がある集団で、これを地域一般住民にあてはめて解釈するのは危険である。さらに、短大・大学での社会人学生の需要についての調査であったが、大学院を含めるとまた違った角度から本学の社会人学生のニーズが明らかになったのかもしれない。さらなる調査・クロス集計などを用いた詳しい分析が必要とされている。しかし、本学に少なからず関わっている、または、興味を持っている地域住民の意識調査をすることはこれからのプログラムの展開にとって有意義であったと考える。

今回の調査をきっかけに、本学の社会人学生と懇談する機会を持つことができ、アンケート内容について、さらに具体的な話を聞くことができた。また、そこでの話し合いから、

2006年度新入生オリエンテーション時に、社会人学生自らが情報を発信する窓口を設置するなど、積極的な行動へとつながったことが喜ばしい。また、本学スミス・ミッションセンターの一部を借りて、「社会人学生アワー」となる定期的な情報交換の場所が確保され実際に利用されているなど、小さな取り組みだが着実な一歩となった。

地域社会には、純粋な学びのニーズがあり、社会人入学に興味を持っている人も実際にいる。学びたいが社会人入学は無理だと考えている人々のために、社会人入学制度見直し、時間的、経済的な問題への対応、情報提供やアドバイザー制度の確立など、不安を取り除く支援体制を整えることで、さらに多くの人々に学びの場を広げることができるのではないかと。

諸外国の先進的な取り組みから学び、成人の学習理論に基づいた大学全体の取り組みが必要であり、社会人学生への大学開放について議論されることが急務である。

【参考文献】

- 稲生頸吾ほか、1994、「大学・大学院の社会人入学に対する卒業生の意識に関する調査研究－青山学院大学卒業生に対する調査研究－」『生涯学習と資格』日本生涯教育学会年報 第15号, pp. 223-230
- 岩永雅也、2001、「生涯学習と大学ネットワーク」『生涯学習と教育改革の時代』日本生涯教育学会年報 第22号, pp. 31-48
- 小池源吾・佐藤進、2004、「高等教育機関と成人学習者」『成人の学習と生涯学習の組織化』東洋館出版社
- 小林健一、2003、「遠隔教育による大学開放の現状と課題－わが国におけるグローバル化への対応を中心に－」『生涯学習と公共性』日本生涯教育学会年報 第24号, pp. 203-275
- 清水一彦、2001、「生涯学習と大学システム問題－単位互換制度・編入学制度を中心に－」『生涯学習と教育改革の時代』日本生涯教育学会年報 第22号, pp. 13-30
- 高尾公矢、1994、「大学教育と社会人特別選抜－福島大学夜間主コースを中心として－」『生涯

- 学習と資格』日本生涯教育学会年報 第15号,
pp. 231-243
- 館昭, 2002, 『短大からコミュニティ・カレッジへ』
東信堂
- 出相泰裕, 2005, 「成人の大学等への入学に対する
阻害要因に関する一考察 ー大阪市における
女性講座受講者に対する調査からー」『変革期
における生涯学習推進』日本生涯教育学会年
報 第26号, pp. 149-165
- 松井純子, 2005, 『『生涯学習機関としての大学』
のあり方ー日本の小さな実践とアメリカのベ
スト・プラクティスの体験を踏まえてー』『変
革期における生涯学習推進』日本生涯教育学
会年報 第26号, pp. 107-114
- 渡邊洋子, 2002, 『生涯学習時代の成人教育学』明
石書店

[Abstract]

The Educational Needs of Adult Learners in the Community

Kyoko MORIKOSHI

This paper is a report on the results of two questionnaires on the educational needs of adult learners in the community. Adult learners who have been away from the classroom for extended periods of time often have difficulties in studying at Japanese universities. The reason for this is that the universities are mainly developed for traditional students who are applying directly from their high schools, not for non-traditional students. Therefore, the difficulties and needs of non-traditional students at Hokusei Gakuen University have been examined in the first questionnaire. The other questionnaire is focused on adult learners in our local community. As some of them have participated in our "open university programs," we have assumed they may have an interest in applying to the university as full-time students. The results of the two questionnaires have shown the pure learning needs of adults, but they have also disclosed that they face financial difficulties and time restrictions. More importantly, many adults experience anxiety while learning at universities. Universities and colleges should not only change their policies and facilities to fit adult learners' needs, but also have a more flexible approach which would help lessen their fears about learning. Thus, there should be adequate support for adult learners who wish to pursue an education at a later time in their lives.

Key Words: adult learners, higher education, educational needs